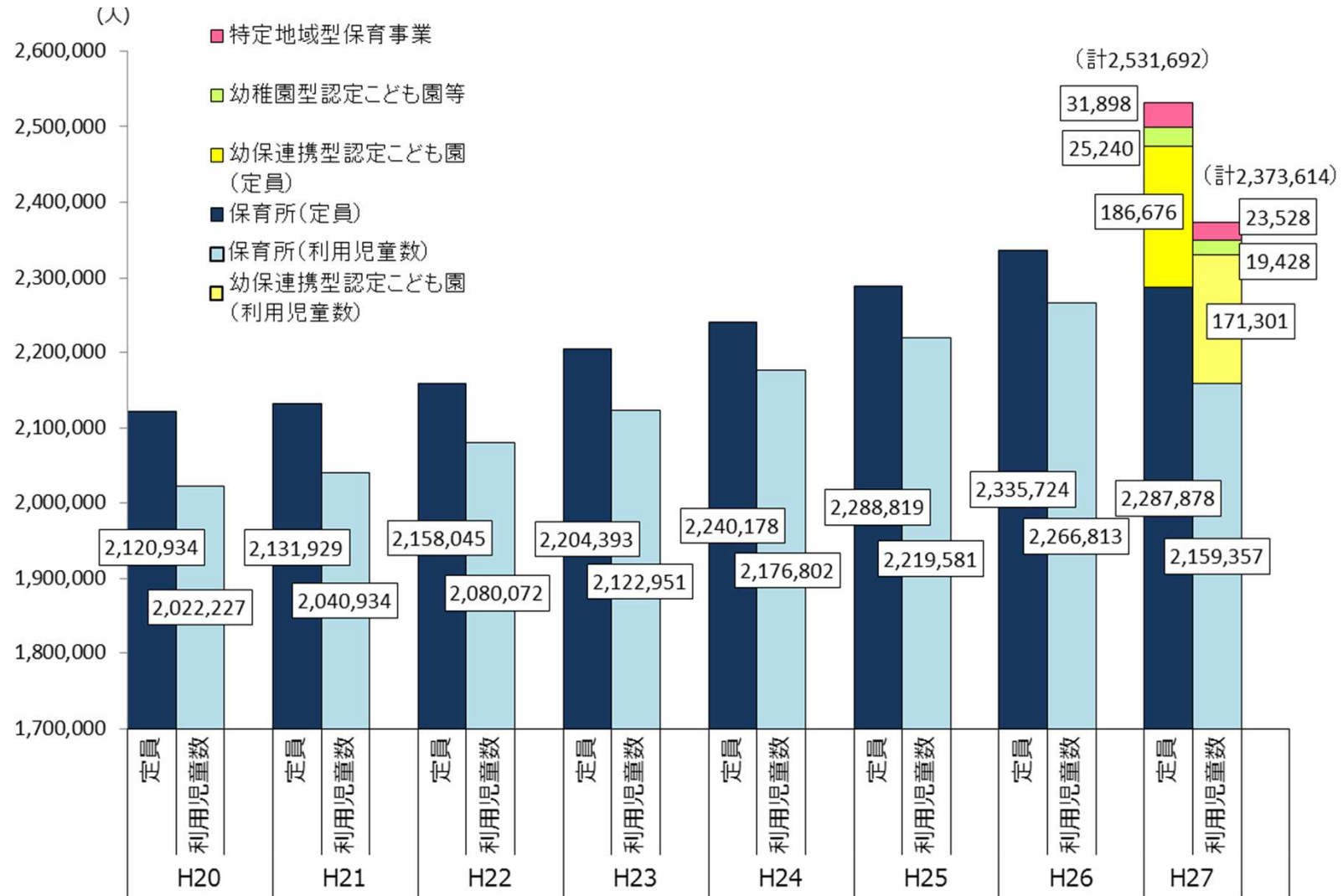


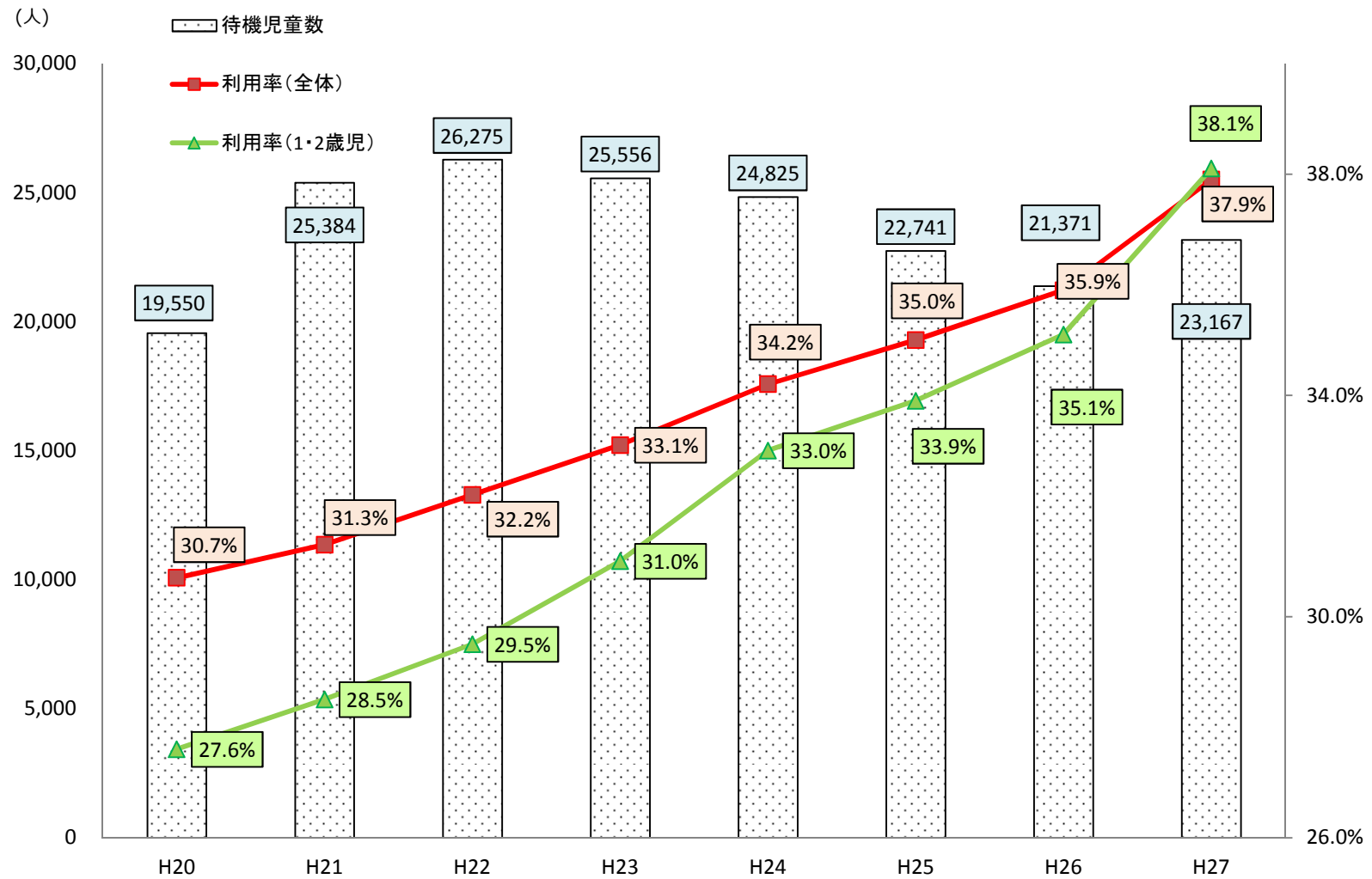
保育をめぐる現状

保育所等定員数及び利用児童数の推移



(出典) 22年以前、26年 一厚生労働省大臣官房統計情報部「福祉行政報告例」
23年～25年、27年 一厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課調べ

保育所等待機児童数及び保育所等利用率の推移

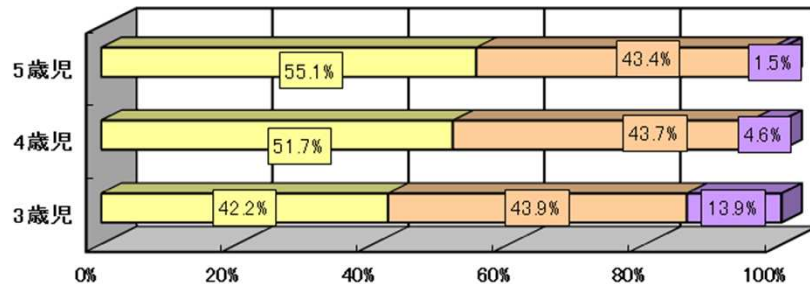


就学前教育・保育の実施状況(平成25年度)

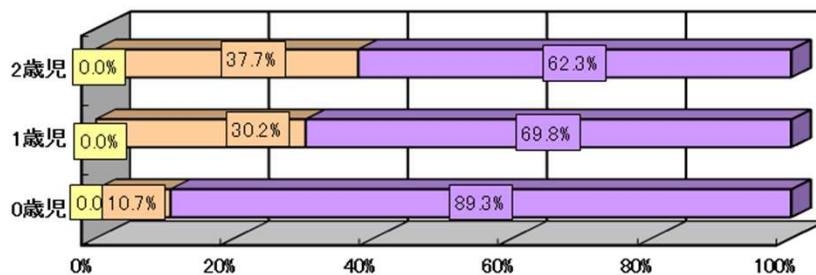
- 3歳以上児の多く(4歳以上児はほとんど)が保育所又は幼稚園に入所
- 3歳未満児(0~2歳児)で保育所に入所している割合は約3割

就学前教育・保育の実施状況(平成25年度)

【3~5歳児】<学年齢別>



【0~2歳児】



□ 幼稚園就園率 □ 保育所入所率 □ 未就園率

	幼稚園 在園者数	幼稚園 就園率	保育所 在所児数	保育所 入所率	推計未就園児数	未就園率	該当年齢人口
0歳児	0人	0.0%	112,000人	10.7%	932,000人	89.3%	1,044,000
1歳児	0人	0.0%	322,000人	30.2%	745,000人	69.8%	1,067,000
2歳児	0人	0.0%	394,000人	37.7%	650,000人	62.3%	1,044,000
3歳児	440,988人	42.2%	459,000人	43.9%	145,012人	13.9%	1,045,000
4歳児	554,896人	51.7%	469,000人	43.7%	49,104人	4.6%	1,073,000
5歳児	589,330人	55.1%	464,000人	43.4%	15,670人	1.5%	1,069,000
合計	1,585,214人	25.0%	2,220,000人	35.0%	2,536,786人	40.0%	6,342,000
うち0~2歳児	0人	0.0%	828,000人	26.2%	2,327,000人	73.8%	3,155,000
うち3~5歳児	1,585,214人	49.7%	1,392,000人	43.7%	209,786人	6.6%	3,187,000

※保育所の数値は平成25年の「待機児童数調査」(平成25年4月1日現在)より。

4・5歳は「社会福祉施設等調査」(平成25年10月1日現在)の年齢別割合を乗じて推計。

※幼稚園の数値は平成25年度「学校基本統計」(平成25年5月1日現在)より。

なお、「幼稚園」には特別支援学校幼稚部を含む。

※該当年齢人口は総務省統計局による人口推計年報(平成24年10月1日現在)より。

※「推計未就園児数」は、該当年齢人口から幼稚園在園者数及び保育所在所児数を差し引いて推計したものである。

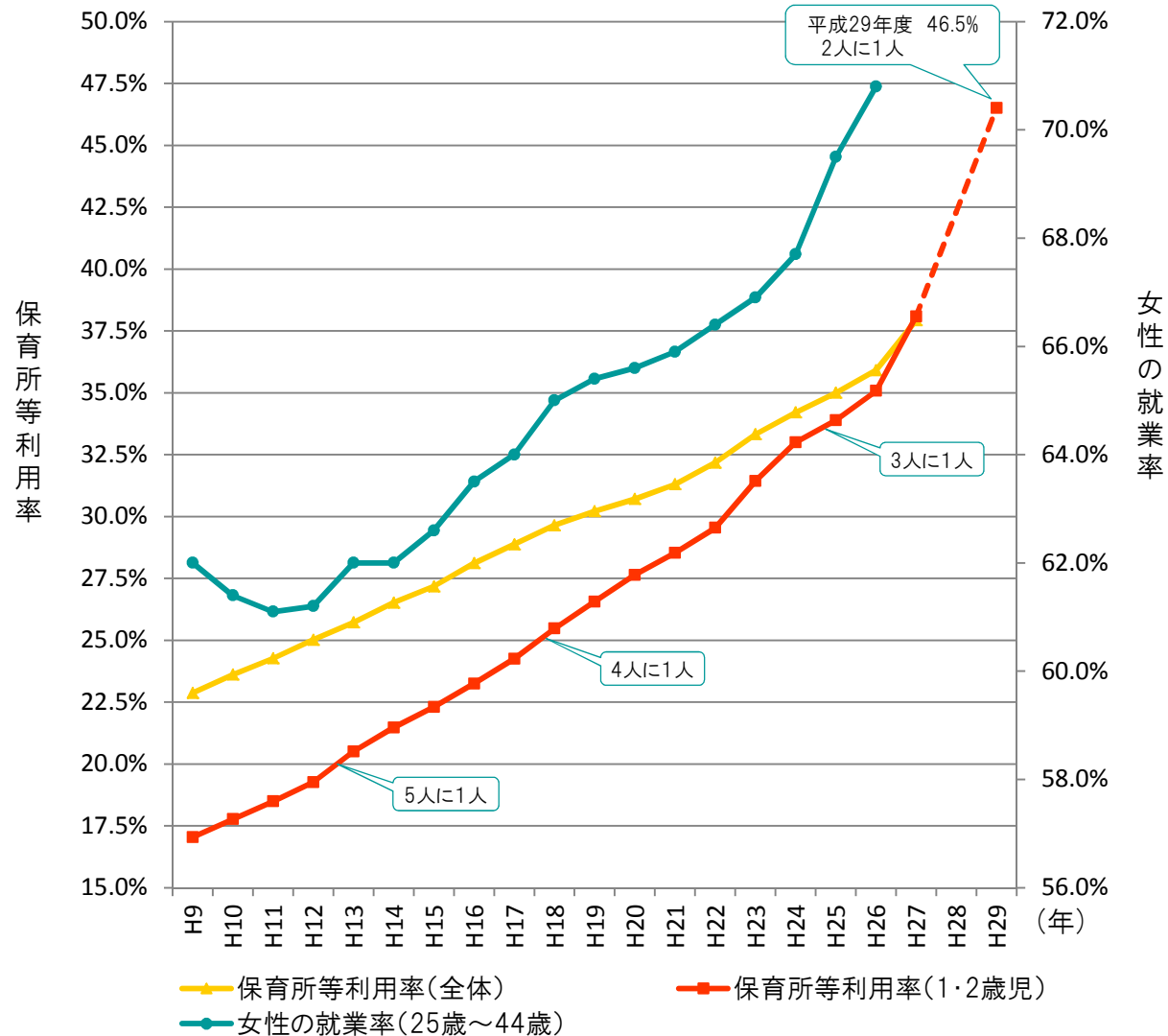
※「待機児童数調査」、「社会福祉施設等調査」については、東日本大震災の影響により調査を実施していないところがある。

※四捨五入の関係により、合計が合わない場合がある。

女性の就業率と保育所等利用率の関係

○ 女性の就業率の上昇は、保育の受け皿拡大が支えている。

女性の就業率（25～44歳）と保育所等利用率の推移



出典：厚生労働省「福祉行政報告例」、総務省「人口推計年報」、総務省「労働力調査」

海外の調査研究

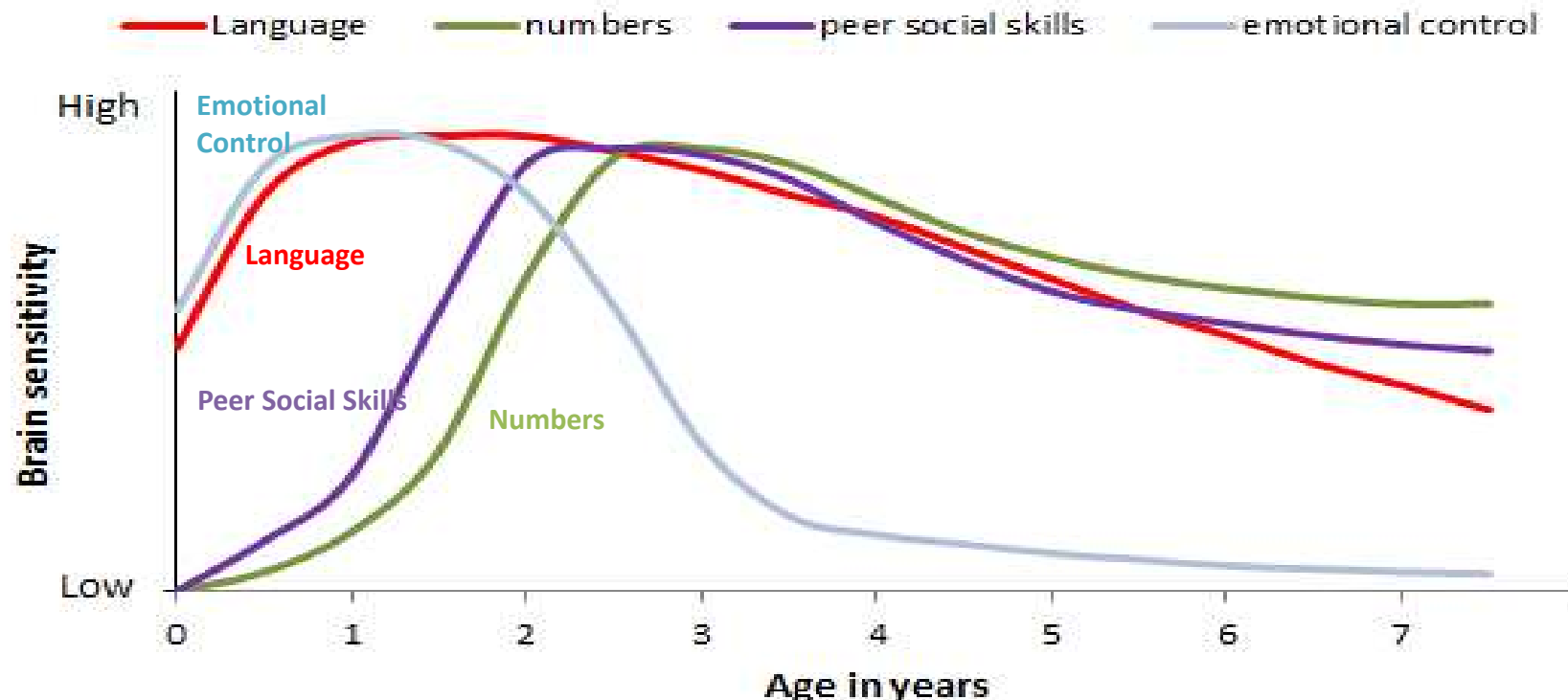
保育・幼児教育の効果に関する海外の調査①

Brain sensitivity is highest for different types of foundation skills before children enter school.

(幼少期における脳の感受性)

Ensuring access to quality ECEC is important for all children, to ensure an opportunity to learn and grow in good learning and well-being environments.

子どもの脳は生まれると同時に発達しており、幼少期から様々な脳機能を発達させる環境を充実させることが重要。量を拡大し受け入れ体制を整備することを前提として、子どもに高い質のECECの機会を提供することが極めて重要。



保育・幼児教育の効果に関する海外の調査②

米国NICHD (National Institute of Child Health and Human Development) 調査 (1991～2007年)

1) 保育の質の高さ(特に、保育者の言葉がけなどプロセス面)が、乳幼児の知的能力や言語発達と関連。

- ・3歳になるまでに質の高い保育を受けた子どもは、そうでない子どもと比べて、3歳になるまでの期間を通してやや高い知的能力と言語発達が見られた(NICHD, 1999; NICHD, 2000)。
- ・特に保育者の言葉の使い方(質問、応答性、その他の言葉がけ)が重要(NICHD, 2000)。
- ・3歳になるまでに質の高い保育を受けた子どもは、そうでない子どもと比べて、4歳半の時の言語能力や数字の理解といった標準テストの成績も良かった(NICHD, 2002)

※ただし、いずれも家庭や両親についての要因の方が、保育の質よりも子どもの発達に影響。

※この調査における「保育」とは、母親以外のものによって、業として行われるものをいう。

2) 保育者(教師)と子どもとの良好な関係(3歳時点)が、小学3年時の学業成績に影響。

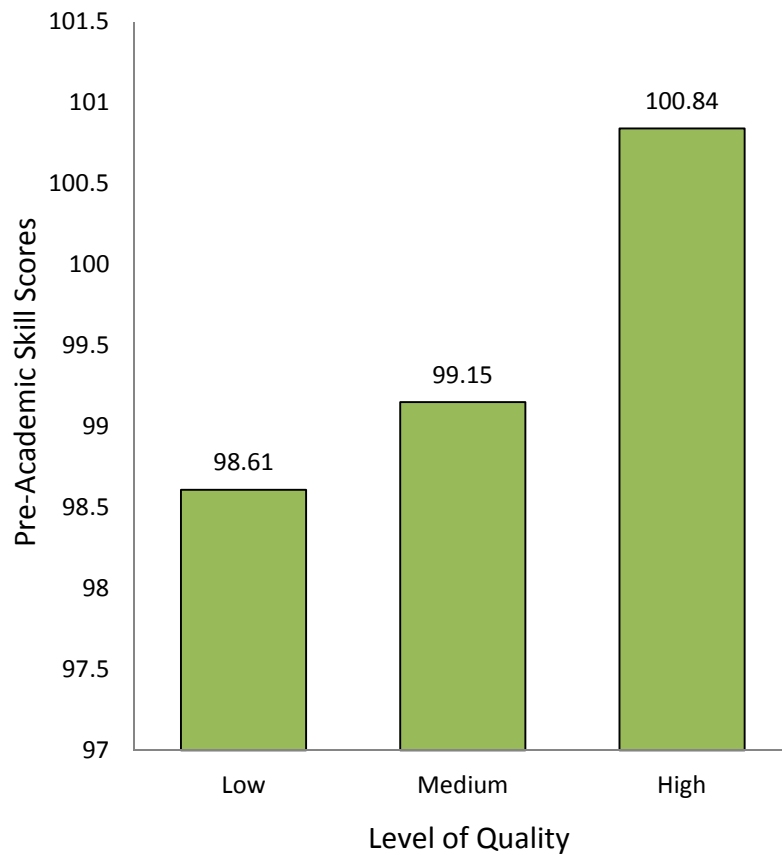
- ・特に、母親とのアタッチメントが不安定である場合、保育者(教師)と良好な関係をもつ経験による効果が大きい。

(E. O'Connor and K. McCartney (2007). Examining teacher-child relationships and achievement as part of an ecological model of development. *American Educational Research Journal*, 44, 240-269.)

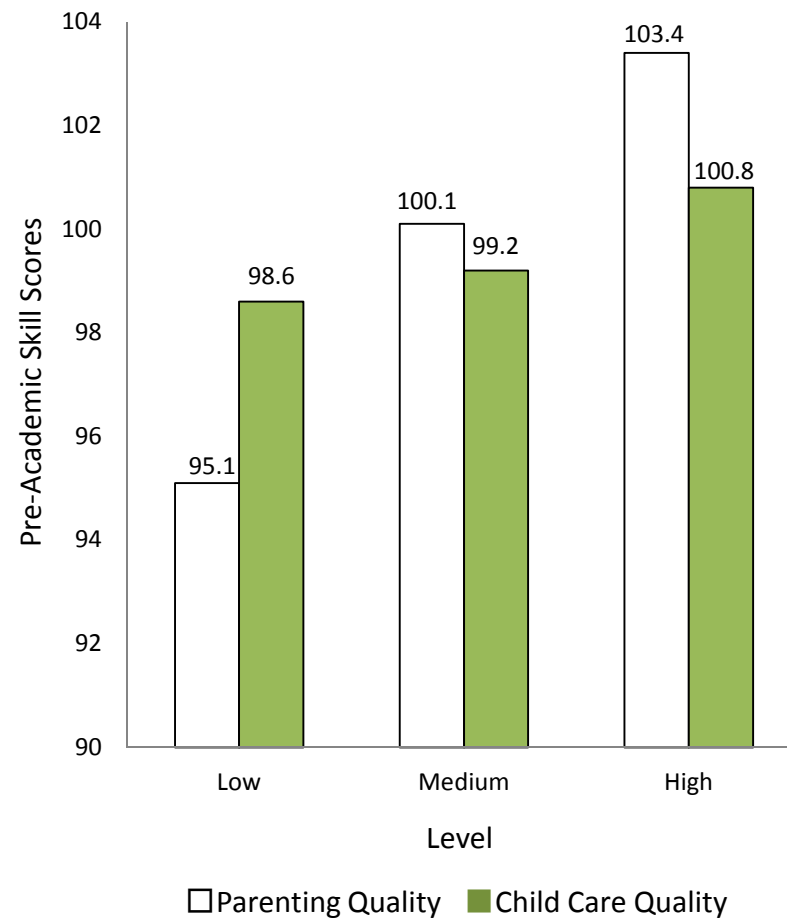
(参考) 保育の質と認知・言語発達の関係

Child care Quality and cognitive and Language Development Outcomes

保育の質と子どもの発達
Quality of Care and Child Outcomes



保育の質・家庭の要因と子どもの発達
Parenting Quality Versus Child Care Features



保育・幼児教育の効果に関する海外の調査③

英国EPPE (Effective Provision of Pre-school Education) 調査 (1997～2008年)
EPPSE (Effective Pre-school and Primary Education) 調査 (1997～2014年)

※2歳児のいる約3,000の家庭を3歳から7歳、7歳から11歳、16歳時点で縦断調査。

1) 保育のより良い質・期間の長さが、子どものリテラシー・数の発達と関連。

より良い質の保育を、より長期間受けた子どもの方が、そうでない子どもよりも、小学校入学時点でのリテラシーの成績が良い。(保育を受けた期間が「1～2年」より「2～3年」、保育の質が低いより高い)

2) EPPE・EPPSE調査で「すぐれている(excellent)」と評価された12のプリスクールでは、以下の5つの領域で共通の特徴が確認された。(※次項参照)

- i) 保育者と子どもの言語的かかわり
- ii) カリキュラムに関する知識と理解
- iii) 乳幼児がどのように学ぶかに関する理解
- iv) 子どものいざこざ解決を支援するスキル
- v) 子どもたちの家庭学習を行う保護者への支援

東京大学教育学部 遠藤利彦研究室作成資料より作成

保育・幼児教育の効果に関する海外の調査④

英国REPEY (Researching Effective Pedagogy in the Early Years) 調査

1) EPPE調査・EPPSE調査の結果を踏まえ、前項 i)～v)のうち、すぐれている(excellent)プリスクールの特徴を分析した結果、共通点が確認された。(Siraj-Bratchford et al., 2002)。特に、保育者と子どもたちとのかかわりに関する共通点は、以下の二点。

①保育者の子どもたちへのかかわりが、温かく、応答的であること

②「ともに考え、深め続けること(Sustained Shared Thinking)」と呼ばれるかかわりを含む、保育者と子どもたちの質の良いかかわり。

※「ともに考え、深め続けること(SST)」とは、「二人もしくは二人以上が、知的な方法で“一緒に”取り組み、問題を解決し、ある概念について明らかにし、自分たちの活動を捉え直し、語りを広げたりすること。どの参加者も、ともに思考することに貢献し、思考を発展させたり広げたりすることが求められる。」と定義されている。

※英国SEED (Study of Early Education and Development) (2010年～)調査において、上記の「ともに考え、深め続けること(SST)」について、子どもの発達を支える子どもの経験とかかわりを測定するための新しいスケールを開発。

2)他にも、すぐれている(excellent)プリスクールほど、子ども主導の遊びや活動、子どもが中心で教師がつなぎ発展させる遊びや活動が多いという特徴。

(Siraj-Blatchford, I., & Sylva, K. (2004). Researching pedagogy in English pre-schools. *British Educational Research Journal*, 30(5), 713–730.)

保育・幼児教育の効果に関する海外の調査⑤

米国(Peak, Heble, & Mischel, 2002; Schlam et al., 2013; Casey et al., 2011)調査

満足の遅延実験に参加した子どもたちの追跡調査
(4歳でマシュマロ課題(N=164)⇒44歳まで追跡)

自己の行動と感情を調整する側面

- ・マシュマロ課題
 - ⇒幼児期の「がまんする」能力や方略を調べるテスト
 - ⇒目の前のマシュマロ1つもらうか、それを我慢して後でマシュマロを2つもらうか
 - ⇒1つもらう子ども=我慢できない子ども
 - 2つもらう子ども=我慢できる子ども

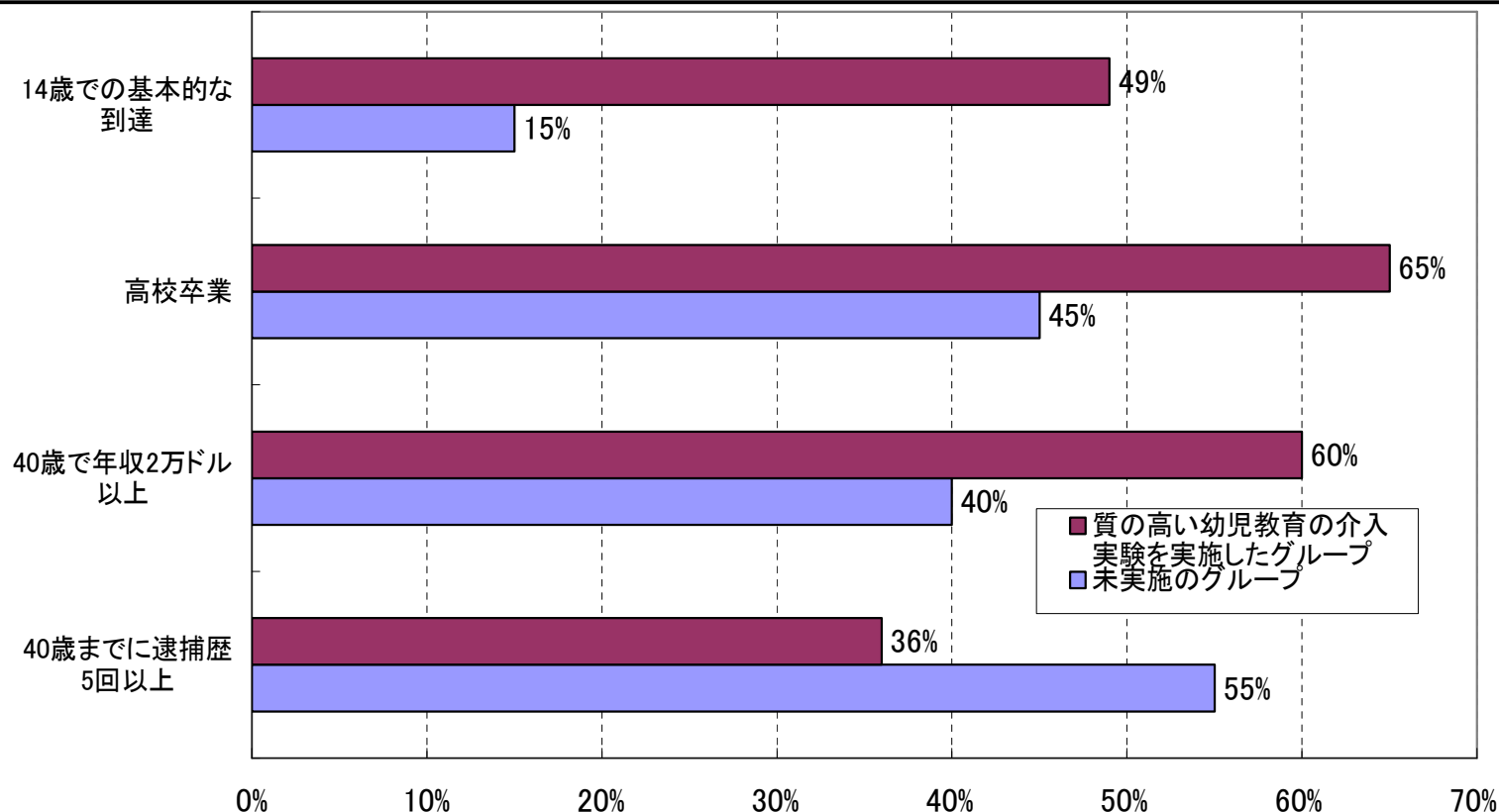
4歳	10歳	17歳	20歳	39歳
マシュマロ課題で我慢できた子供たち	言語の流暢さ、合理的な思考、注意力、計画性、フラストレーションへの優れた対処の仕方	大学進学適正試験(SAT)の得点が高い	社会的能力、優れた自己制御能力、高い自尊心	身体測定低いBMI
我慢できなかった子供たち	上記能力が相対的に低い	SAT: 低い 210pointの差	上記が相対的に低い	高いBMI

保育・幼児教育の効果に関する海外の調査⑥

幼児教育への投資の効果 学力・経済力の向上

幼児期の教育は生涯にわたる学習の基盤を形成するものである。

質の高い幼児教育を受けることにより、その後の学力の向上や、将来の所得向上、逮捕歴の低下等につながるという調査結果が示されている。（ペリー就学前計画※の結果による）



出典： Heckman and Masterov (2007) “The Productivity Argument for Investing in Young Children”

※「ペリー就学前計画」とは、1960年代のアメリカ・ミシガン州において、低所得層アフリカ系アメリカ人3歳児で、学校教育上の「リスクが高い」と判定された子供を対象に、一部に質の高い幼児教育を提供し、その後約40年にわたり追跡調査を実施しているもの